

文学の研究には、文学がわかるということが必要なのではないかと思う。訓詁注釈に終始している人でも、その作者のもっている文学的情熱に無理解では完璧な注解は不可能であろう。

文学がわかるということには、文学形成の諸要素にそれぞれの理解をゆきとどかせることが

考えられるが、最も基本的なところでは、表現をうながした作者の問題意識に対して周到な理解をもつことだろうと思う。問題意識は

主として、社会の問題、人生の問題、人間関係の問題により、多く集中されるだろう。とくに小説や戯曲の場合にそれは顕著にあられる。

そういう問題意識が、最も生彩をもって表われるのは人物形象である。江戸期の戯作、とくに読本や草双紙あたりでは、善玉悪玉の

形で、作者のモラル(らしきもの)が表出されるが、近代文学になると、そういう類型化が退けられるので、どの人物を作者は支持しているのか、どの人物を否定しているのかとまどう場合もないわけではない。

二葉亭の『浮雲』で、文三を古

弱いが正しい人間

和田繁二郎

いタイプと見、昇を新しいタイプと見、そこで作者は文三を否定したのだとするような妙な意見が出たりするのはその例になろう。そういう意見が出るのは、文三の形象に否定的なおいがあることによるからだが、基本的に二葉亭の人生観・世界観を知って

おれば、二葉亭の自嘲癖のなせるわざであることがわかるはずである。そうして、文三の堅持しようとする正直の倫理を支柱として文三を肯定しようとしていることがわかるはずである。さらに言えば肯定しようとして苦しんでいることがわかるはずである。

少し飛躍した感想になるかもしれないが、文三を否定したというような意見を出す人は、昇的な人ではないかろうか。あるいは「自由主義の圧制家」である課長のような人ではないだろうか。

近代文学はとくに、弱いが正しい人間の苦しみを描いて、社会の悪にプロテストした秀作が多い。そこで、弱いが正しい人間については、その苦しみがわかる人ではないかと思う。